

韓国訪問記；日本赤十字社長崎原爆病院、森 秀樹、2003年9月記

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）平成15年度専門医師等
韓国派遣事業

訪問地；大韓赤十字社

陝川（ハプチョン）原爆被害者福社会館

大邱（テグ）赤十字病院

ソウル在韓被爆者支援事業連絡事務所

訪問日；2003年7月7日～7月10日

人員；長崎大学医学部付属病院永井隆記念国際ヒバクシャ医療センター助教授、
天津留晶先生、そして長崎県原爆被爆者対策課係長、草場里見氏と私

7月7日午後、賑やかなソウル市内に到着早々、大韓赤十字社の事務総長 Lee, Young Goo氏を表敬訪問しました。事務総長との会見は当初緊張した面持ちでありましたが、次第に和やかな雰囲気になり予定時間を1時間以上超過し、実りの多いものになりました。氏はこれまでのNASHIM事業による韓国医師等の研修と、在韓被爆者支援事業の窓口を大韓赤十字に委託してもらうことを感謝していると申されました。さらに、韓国内におられる約2100名の被爆者は高齢化しており、訪日が困難な人も増加していることから、今後被爆者健康手帳の交付などの業務も韓国内で出来るように希望するとの事でした。最後に氏を長崎にご招待する旨を申し出て、日韓の友好が促進されることを共に期待してお別れを致しました。

その日の夜は石蘭（Korean Restaurant Sokran）というソウル市内の韓定食専門店で大韓赤十字社総裁補佐 Sung, In-Sookさんから歓迎会を開いていただきました。Sungさんは石蘭の近くにある梨花女子大学を卒業後、30年間文化関係の新聞記者をされ、2000～2003年の間、金大中前大統領夫人の秘書官を勤められた方ですが、今回大統領が交代したことにより大韓赤十字社の総裁補佐に就任されました。日本のものよりライトなOBビールとソジュという焼酎で座もくつろぎ、同席された大韓赤十字社特殊福祉事務所長 Won-Gun, Jun氏とは硬い握手でお別れしました。

7月8日、仁川（インチョン）国際空港から大邱空港まで飛行機で移動し、ワゴン車で陝川原爆被害者福社会館に向かいました。途中の景色は日本の田舎の風景とほとんど同じに見えました。ここは戦前、日本に働きに行かざるを得なかった人が多かったために、被爆者が他所よりも多く住んでいるとの事でした。

た。戦後、韓国へ戻った被爆者の方々は被爆後遺症以外にも社会的に様々な苦難があり、高齢になるにしたがい、生活保護対象者や身寄りのない独居老人の方々が多くなってきました。そのために被爆者を対象として1996年10月に日本政府の在韓被爆者支援基金から出資されて、陝川原爆被害者福祉会館が建築されました。同館は地下1階、地上3階の建物で、収容人員は80名です。希望者が多く、入居待ちは4～6月かかるそうで、現在男性17名、女性62名、計79名(61歳～99歳、平均年齢78歳)の方々が入居されていました。また、同会館敷地内に被爆慰霊閣が建立されており、751の位牌が安置されており、この位牌の中の一つに長崎徴用工原爆犠牲者神位と記されていました。

Lee Byoung - Yong 館長のお話では長崎でNASHIM研修をされた職員の方々が帰国後、皆温かい態度で患者さんに接するようになって思いやりが出てきたとの事でした。また、NASHIM事業に感謝するとともに、この研修事業を引き続き望んでいると申されました。その後、館内を案内していただき、被爆者の方々にもご挨拶が出来ました。午後は、慶尚南道の伽倻山の奥深くにあり、幽玄の趣のある名刹海印寺に案内していただきました。このお寺には蒙古軍を駆逐祈願するために作った高麗八萬大蔵経が残り、これが世界遺産になっているとのことでした。

7月9日、車で大邱に戻りました。大邱市は人口260万でソウル、釜山に次いで韓国第3の都市であります。大邱赤十字病院を訪問し、院長Young - Jae Kwon先生の他に本年2月と6月にそれぞれ原爆病院に来られた臨床病理室長、内科科長ともお会いいたしました。大邱赤十字病院は1945年に開院し、1976年11月に地下1階地上5階の病院本館が建築されました。現在、医師7名(内科2名、整形外科1名、神経内科1名、精神科1名、家庭医1名、放射線科1名)、事務職6名、技師10名、看護師25名の職員がおられます。病床は134床で近いうちに精神科が50床増床になるとのことです。驚いたことに、すでに玄関には院内禁煙の表示がされていました。

会談では高齢化した被爆者で訪日が困難な人々の為に韓国内での被爆手帳交付と、管理手当てに必要な健康診断その他の手続きを可能にしてほしいとの要請がありました。もし、困難な場合はNASHIM事業で韓国を訪れる日本人医師や長崎県職員の方が、大韓赤十字で必要な書類やデータはまとめておくので、それらの手続きを代行できないだろうかという希望もありました。

この日の夜、韓定食をご馳走になりました。席上大邱赤十字病院から日本赤十字社長崎原爆病院に対して姉妹病院締結希望の話があり、当方も賛同の意を示して帰国後協議することを約束しました。大邱赤十字病院は在韓被爆者の患者さんが多く受診されるとのことです(一月の入院患者20名、外来患者50名)

在韓被爆者治療の中心的役割を果たしている病院の一つであり、長崎原爆病院との締結は日韓友好の意味も含めて、被爆者治療の点からも非常に有意義なものと考えられました。2次会では日本と同じくカラオケに行きまして、さらに日韓友好ができました。

7月10日朝、大邱空港から仁川国際空港まで飛行機で移動し、ソウル在韓被爆者支援事業連絡事務所を訪問しました。この事務所は長崎県・市、広島県・市の共同で設立した財団法人で在韓被爆者の被爆者支援事業の事務手続きを代行していますが、大韓赤十字社が被爆者支援事業の受諾を行ったことで、ここで実施してきた業務を大韓赤十字社に移すことになるとのことでした。その後、車で仁川国際空港に向かい、福岡空港に向けて飛び立ちました。

短い訪問でしたが、他所に出向いて始めてわかりあえることが出来るということが身にしみて感じました。それが本当の交流につながり、有効の和が広がっていくと思われました。今後も現場での在韓被爆者支援をNASHIMのような民間レベルで実施し、かつ継続することが重要と考えられ、日本赤十字社長崎原爆病院としてもこのような国際的事業に進んで参加すべきであると考えられました。



大韓赤十字社にて事務総長と記念撮影